

# 新しい研究主題への出発

学 校 長 田 口 則 良

## 1. 研究主題の意味づけ

平成5年6月の第99回東雲教育研究会後、研究主題が「個が生きる授業の評価」から「豊かな感性を育む」に変わることになった。それ以来、本校教官は学校教育学部の黒田耕誠教授、教育学部の片岡徳雄教授、玉川大学の岡田陽教授の御講話を拝聴したり、専門書や関係論文を読んだり、また、グループ討議、全体討議を重ね、更に授業研究を通して、研究主題にせまろうと懸命に努力してきた。

その間、「感性」とは何か、豊かな感性が育っている子どもの姿はいかなるものか、本校の子どもには感性は育っているのか、豊かな感性を育むためにどのような支援の方法があるのか、感性を育む授業にはどのようなスタイルがあるのか、感性の評価はどのような視点からなされるのか、教師にはどのような感性をもっていることが望まれるかなどなど、次から次へ疑問が生じ、その度ごとに、また、振り出しにもどって、討議が重ねられてきた。

## 2. 「豊かな感性を育む」の Key word

その追求過程で、再三再四、登場することばとして、次のような単語が挙げられた。

五感、共感、体験、気づき、主体性、表現力、関わり合い、支援などである。多分、「豊かな感性を育む」とは、これらのことばのどれにも関係のある、全体を含む存在のものであろう。

## 3. しばらくされてきた共通のとらえ方

試行錯誤しながら、十分ではないにしても、研究主題をどのようにとらえるかの共通認識が定まってきた。

- (1) 研究領域の範囲を音楽、図工、体育など一部の教科にとどめず、その他のすべての教科、特別活動、道徳まで含める。例えば、読み物教材における「感動」、課題解決学習で課題意識を生起させる「直観」、反社会的行動に対面して怒りを感じる「正義感」なども該当する。
- (2) 感性を育むの「育む」とは、教師が主導的に感性を教え込むのではなく、子どもが主体的に感性を育むことであり、教師は支援者としての役割に徹する。即ち、教師は、子どもの主体的活動を支援する人的環境であり、教材や教具は物的環境である。
- (3) 子どもの主体的活動とは、子ども同志の関わり合い活動の中でもっとも活発に行われる。その意味で、子ども集団が重視される。
- (4) 感性は、本来、内面的な活動ではあろうが、表現活動を介して高められるので、表現活動も含めてとらえる。

今回の討議で「感性」をしっかりつかんでいたつもりでも、次回の討議のときには、どこかに逃げてしまい、まぼろしのような、ぼんやりした存在になる。このようなくり返しの1年間であった。とはいえ、討議や授業研究を継続する中で、確実に視点が定まってきたし、子どもの感性も育ってきたと思う。

今年は研究初年度であり、まだ、自信のある内容ではないが、私たちの努力のささやかな成果を感じとっていただければありがたい。次年度は、更に視点が定まり、すっきりした発表ができるであろう。読者諸氏の忌たんのない御叱正や御助言がいただければ、この上ない幸甚である。

平成6年3月24日